

公益社団法人日本小児保健協会「若手による小児保健検討委員会」

2022 年度会員ニーズ調査

報告書

2024 年 6 月 23 日

公益社団法人日本小児保健協会
若手による小児保健検討委員会

目 次

I. 本調査について

1. 調査実施の経緯
2. 調査の目的および意義
3. 調査方法
4. 予想される利益と不利益
5. 参加について
6. 倫理的配慮
7. 研究資金源および研究に係る利益相反

II. 調査結果(各設問への回答の集計)

1. 回答者の属性等
 - 1) 年代
 - 2) 性別
 - 3) 職種
 - 4) 主な所属
 - 5) これまで本協会の学術集会に参加した回数
2. 入会年数・入会時の状況
 - 1) 入会年数
 - 2) 入会理由
 - 3) 本協会を知ったきっかけ
3. 現在における協会での活動に関すること
 - 1) 本協会の活動の目的を知っているか？
 - 2) 各委員会が行っている活動を知っているか？
 - 3) 小児保健研究誌を読むか？
 - 4) 発表・投稿の場として、なぜ本協会を選択したか
 - 5) 入会してよかったと感じたこと
 - 6) 本協会に期待していること
 - 7) 本協会の活動内容について情報をどのように入手しているか？
4. 今後の協会運営に関するご意見
 - 1) 会員の本協会に関する興味関心を高めるために強化すると良いと思うもの
 - 2) 過去の学術集会で面白かった企画・もう一度聴講したい企画、印象に残っている企画、今後参加したい企画
 - 3) 活動をより魅力的にするにはどうしたら良いと思うか

III. 調査結果にみる本協会の魅力の再発見・期待

I. 本調査について

1. 調査実施の経緯

日本小児保健協会「若手による小児保健検討委員会」では、次世代に向けた、より一層魅力的な活動について検討している。その一環として、理事会の承認を得て、協会員の皆様の本協会に対するニーズや期待などについてアンケート調査を行った。会員のご意見から、本協会の現状を振り返り、魅力ある活動を見出す機会とすることとした。

2. 調査の目的および意義

本調査の目的は、協会員の本協会に対するニーズや期待を明らかにすることである。これにより魅力的な活動と協会の発展に寄与することが期待される。

3. 調査方法

- 1) 調査対象者： 調査時点で、日本小児保健協会の会員
- 2) 調査期間： 2023 年 1 月～2 月末
- 3) 方法： Web アンケート（無記名）

4. 予想される利益と不利益

利益：協会員のニーズを明らかにすることで、本協会の学会活動をより魅力的にすることへ寄与することができる。

不利益：アンケートに 10 分程度の回答時間が必要である。

5. 参加について

参加は自由意思によるものであり、不参加によって不利益を被ることはない。

6. 倫理的配慮

会員の自由意思による回答であること、回答しなくても一切不利益を被ることはないことを説明した。また、個人名、会員番号、メールアドレスは収集せず、個人を特定できないようにした。なお、取得したデータは本調査の目的以外に使用しないことを説明し、同意頂ける会員に回答いただいた。

7. 研究資金源および研究に係る利益相反

COI なし。

Ⅱ. 調査結果

回答者数は 134 名であった。以下に各項目の集計結果を示す。

1. 回答者の属性等

1) 年代

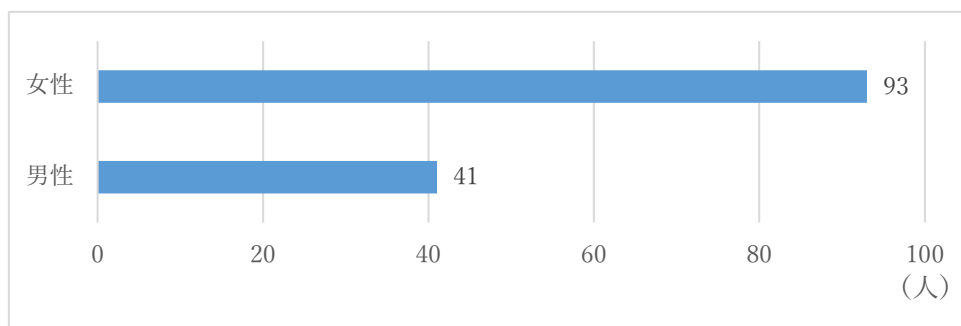
回答者の年代内訳は次の通りであった。

30代：14名（10.4%）、40代：38名（28.4%）、50代：39名（29.1%）

60代：38名（28.4%）、70代以上 5名（3.7%）

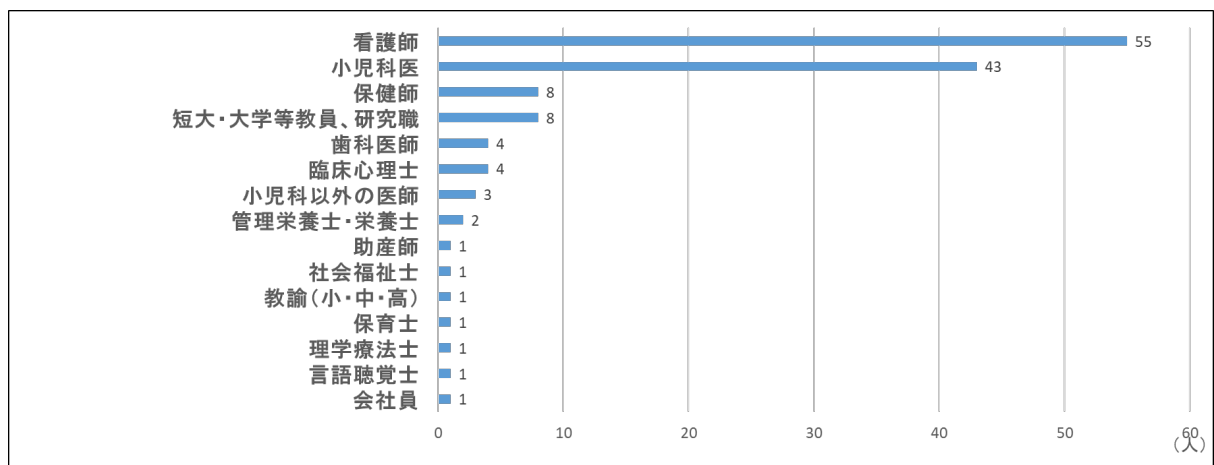
2) 性別

性別は男性41名（30.6%）、女性93名（69.4%）であった。



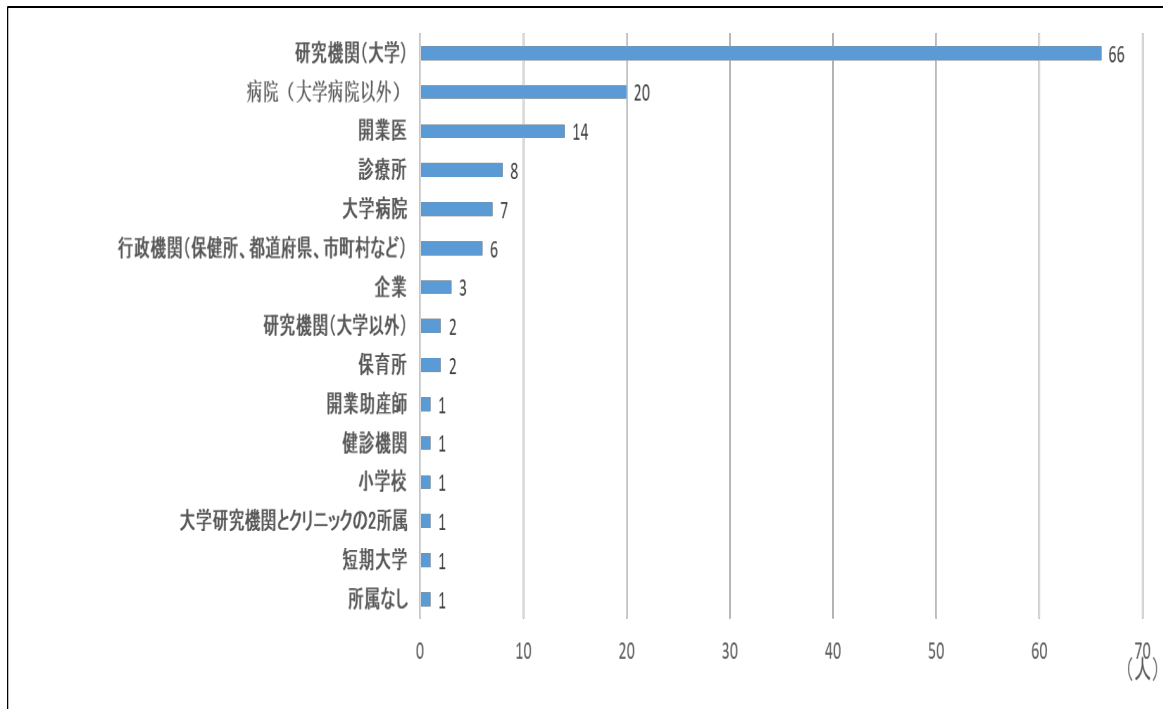
3) 職種

職種については、最も多かったのは看護師 55 名(41.0%)、次いで小児科医 43 名(32.1%)であり、歯科医師、保健師、助産師、臨床心理士等心理職、理学療法士、言語聴覚士、管理栄養士、教諭（小・中・高）、保育士、社会福祉士、大学教員・研究職、会社員と多岐にわたっていた。



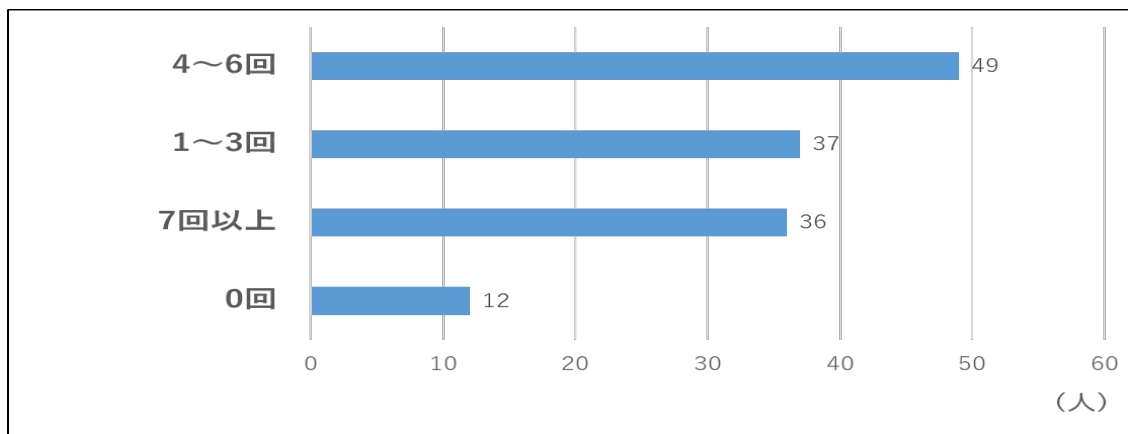
4) 主な所属

最も多かったのは研究機関（大学）の 66 名（49.2%）であった。次いで病院（大学病院以外）20 名（14.9%）であり、開業医・診療所・大学病院等と合わせると医療現場が 4 割弱となっていた。



5) これまで本協会の学術集会に参加した回数

回答者の 91.0%が 1 回以上の参加経験があり、最も多かったのは 4~6 回の 49 名(36.6%)であった。



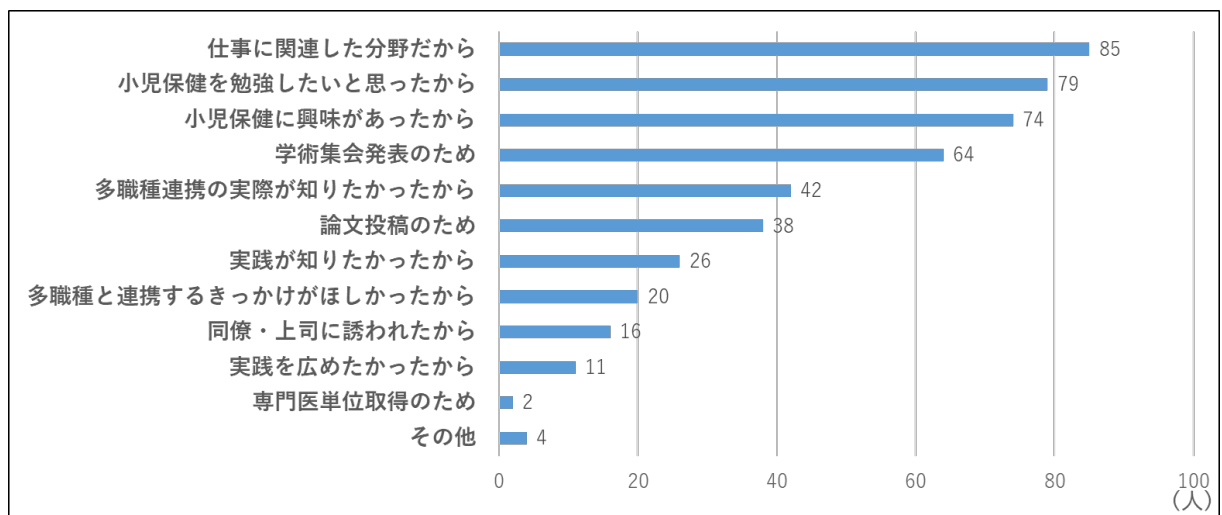
2. 入会年数・入会時の状況

1) 入会年数

81 名から有効回答が得られ、入会して 1 年目から最長 47 年目となっていた。内訳は 10 年以下が 42 名(51.9%)、11~20 年が 21 名(25.9%)、21~30 年が 11 名(13.6%)、30 年以上が 7 名(8.6%)であった。10 年以下の内訳は 5 年未満が 24 名 (29.6%)、6~10 年が 18 名 (22.2%) であった。

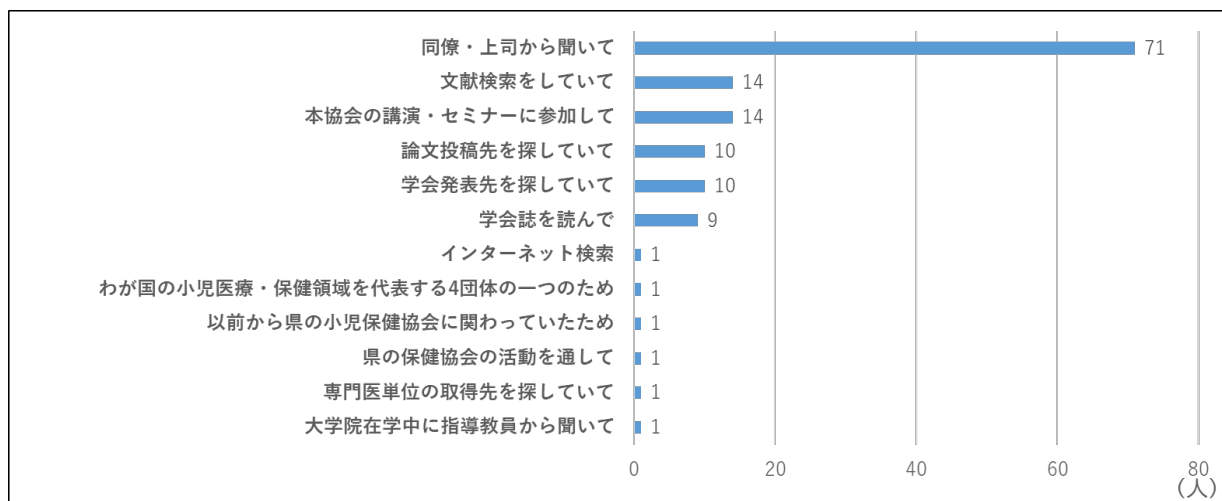
2) 入会理由

入会理由（複数回答）で約半数が選択していた項目は、「仕事に関連」「小児保健を勉強したい」「小児保健に興味があった」「学術集会発表のため」であった。次いで「多職種連携の実際が知りたい」「論文投稿のため」となっていた。その他の内容は「委員を務めるにあたり入会（2 名）」「県の小児保健協会の担当となったため（2 名）」であった。



3) 本協会を知ったきっかけ

本協会を知ったきっかけは「同僚・上司から聞いて」が最も多く、71 名(53.0%)であった。

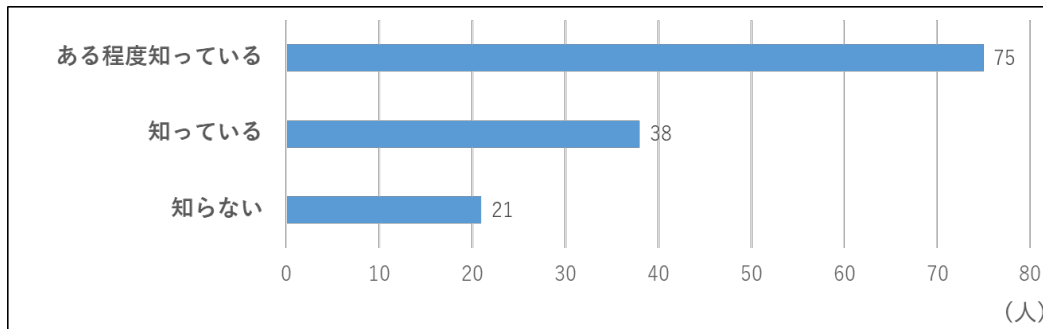


3. 現在における協会での活動に関すること

1) 本協会の活動の目的*を知っているか？

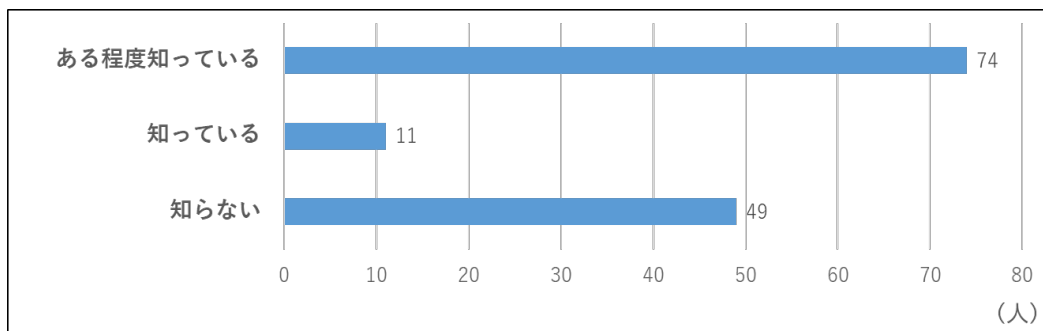
(*小児保健の進歩、発展をはかり、これをもって人類、社会の福祉に貢献すること)

「ある程度知っている」「知っている」を合わせると 113 名(84.4%)であった。



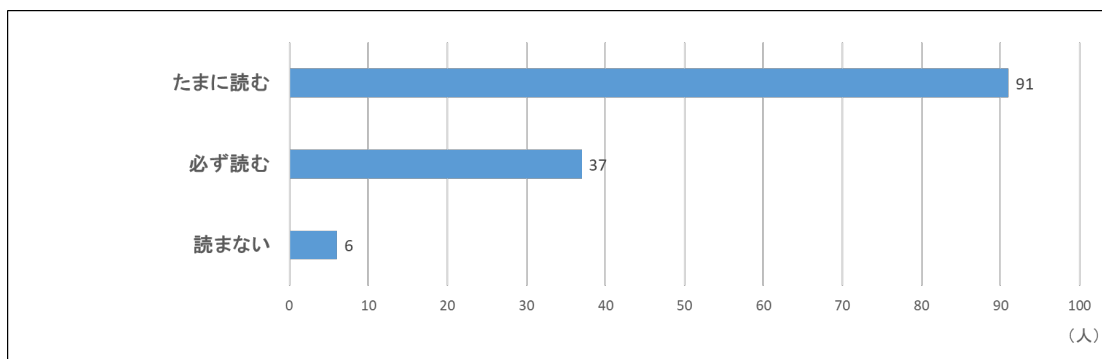
2) 各委員会が行っている活動を知っているか？

「ある程度知っている」「知っている」を合わせると 63.4%であった。



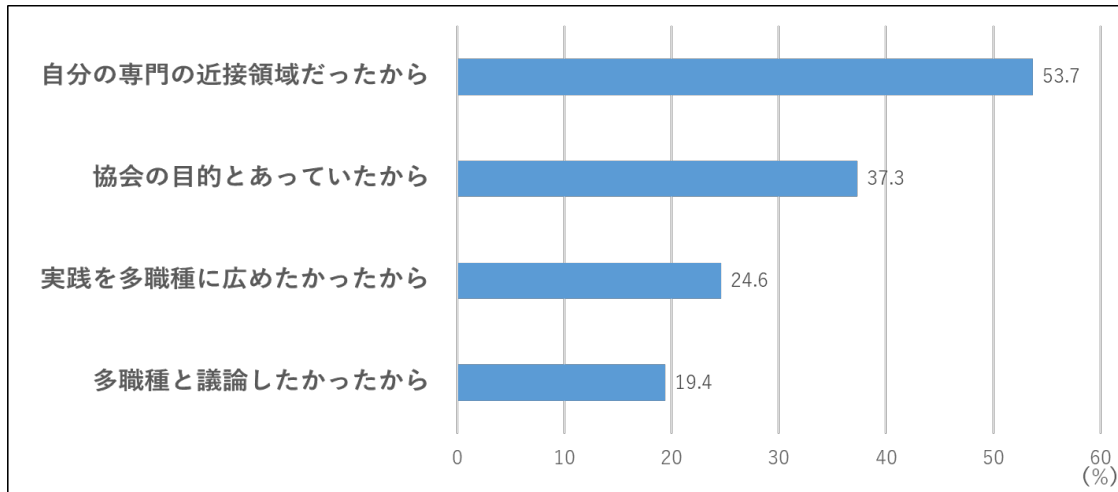
3) 小児保健研究誌を読むか？

回答者の 95.5%が「たまに読む」「必ず読む」と答えていた。



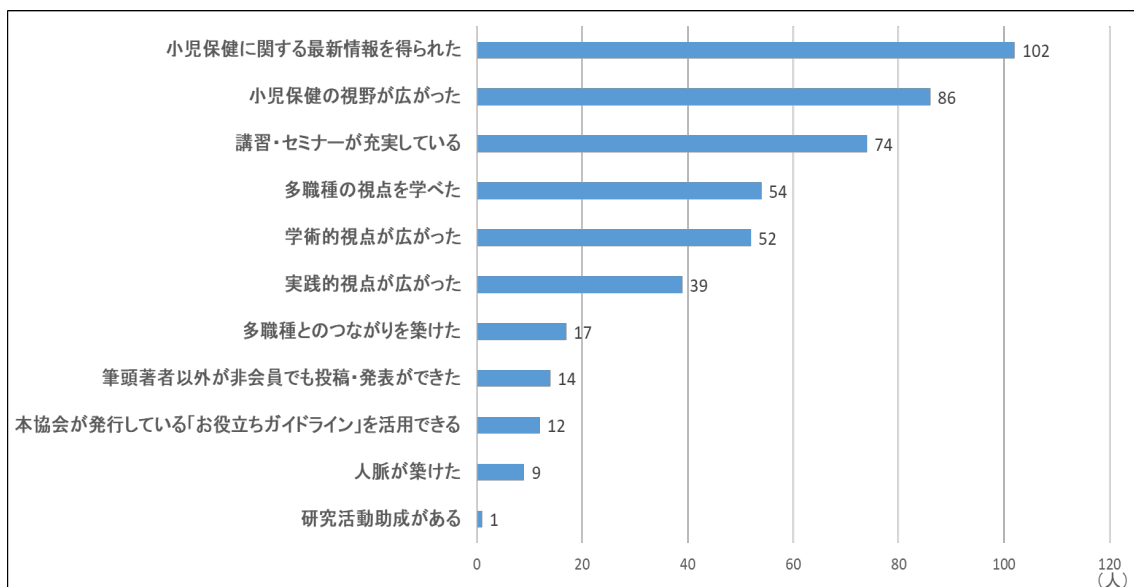
4) 発表・投稿の場として、なぜ本協会を選択したか（本協会での学術集会発表・論文投稿の経験がある方のみ）（複数回答）

「自分の専門の近接領域だったから」が最も多く、53.7%であった。



5) 入会してよかったと感じたこと（複数回答）

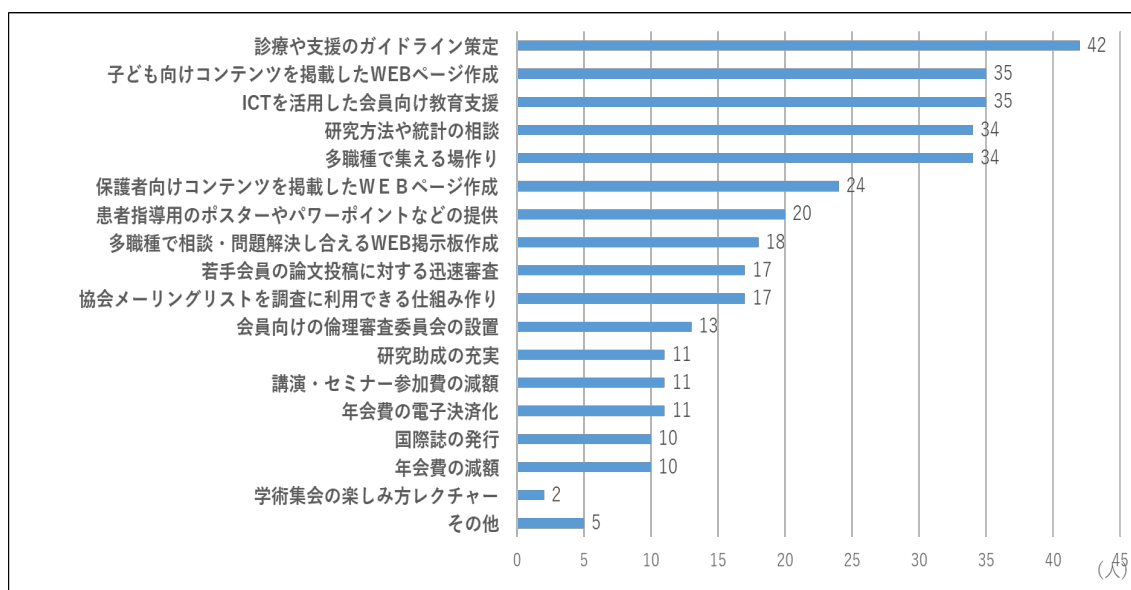
入会して良かったと感じたこと（複数回答）は、「小児保健に関する最新情報を得られた」「小児保健の視野が広がった」「講習・セミナーが充実している」「多職種の視点を学べた」「学術的視点が広がった」が上位となっていた。



6) 本協会に期待していること（最大3つ選択）

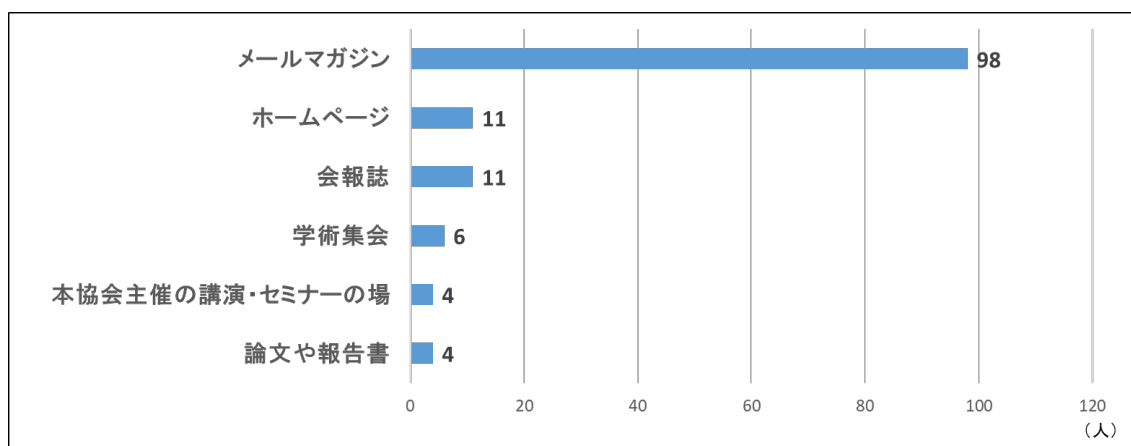
本協会に期待していること（最大3つ選択）で多かったものは、「診療や支援のガイドライン策定」「ICTを活用した会員向け教育支援」に続いて、「多職種で集える場づくり」「研究支援」「子ども向けコンテンツを掲載したWEBページ作成」であった。

その他の内容は「学会費の減額」「様々な知識の習得」「医療と保健福祉の連携の窓口」「子どもの自殺対策」「投稿論文への指導・査読が充実して、多くの論文が掲載されることを望む」であった。



7) 本協会の活動内容について情報をどのように入手しているか？

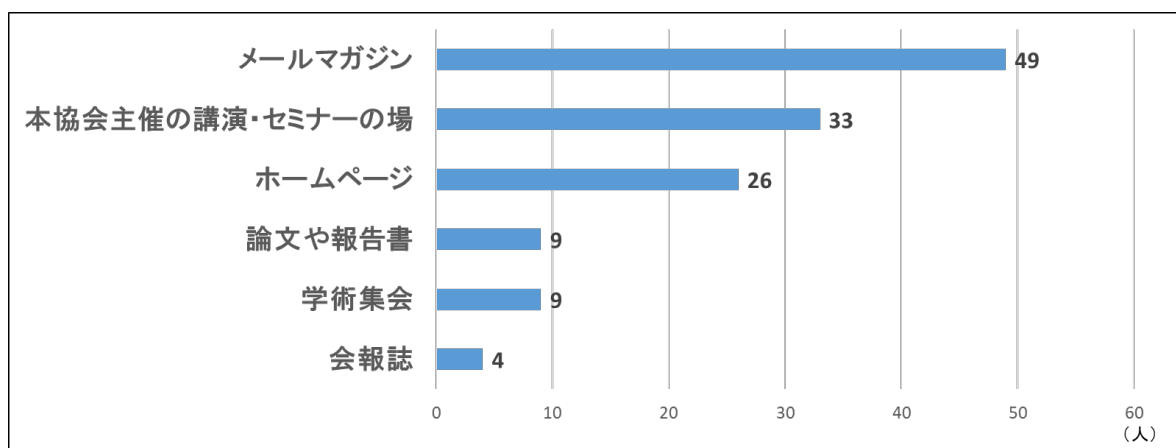
本協会の活動内容の情報源は、「メールマガジン」が圧倒的に多く、次いで「本協会主催の講演・セミナー」であった。今後さらに発展が期待されるものとしても「メールマガジン」が最も多くなっていた。



4. 今後の協会運営に関するご意見

1) 会員の本協会に関する興味関心を高めるために、どれを強化すると良いと思うか

今後さらに発展が期待されるものとしても「メールマガジン」が最も多くなっており、次いで「本協会主催の講演・セミナー」であった。

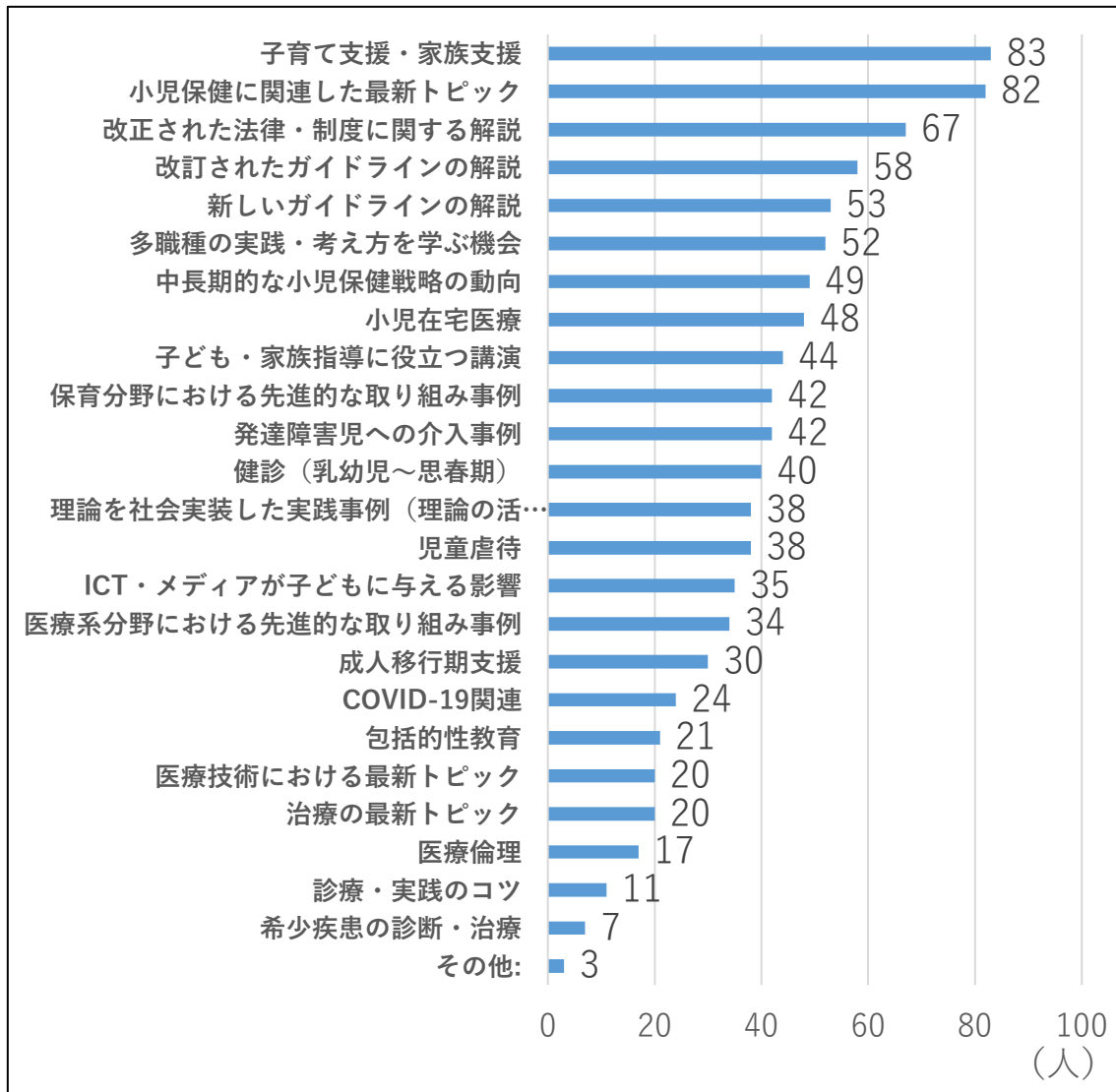


2) 過去の学術集会で面白かった企画・もう一度聴講したい企画、印象に残っている企画

内容	人数
オードリー タン大臣の講演	3
医療的ケア児を地域で支える新しいネットワークとシステム（シンポジウム）	2
虐待防止	2
成育基本法の解説、成立で変わる小児保健	2
多職種のための発達障害の研修会	2
平岩先生の発達障害に関する研修	1
DENVERの講習会	1
山中先生の事故防止のセミナー	1
口腔機能の発達支援に関する多職種連携	1
多職種の連携の仕方やその効果について	1
子どもの摂食・嚥下機能	1
乳幼児健診 3歳児・園・学校検尿	1
子どもの疼痛コントロール	1
HPVワクチンに関する企画	1
子どもと家族の「関係性支援」研修	1
子育て支援	1
小児生活習慣病	1
震災関連の企画	1
第62回の山極先生の特別講演「ゴリラの子育てから見た人間の子どもの不思議」は楽しかった	1

3) 今後参加したい企画（複数回答）

上位から「子育て支援・家族支援」（61.9%）、「小児保健に関連した最新トピックス」（61.2%）、「改正された法律・制度に関する解説」（50.0%）となっていた。続いて「ガイドラインの解説」「多職種の実践・考え方を学ぶ機会」が続いていた。



3) 活動をより魅力的にするにはどうしたら良いと思うか【自由記述】

(1) 若手の活用

- ・ 若手研究者にも、学会活動に参加してもらった方がよい。
- ・ 若い会員に委員会のメンバーになってもらう。
- ・ 学術集会、セミナーなどへの若手の参加促進。
- ・ 若手の小児保健関係者の参加を増やすこと。

(2)多職種連携

①運営に関すること

- 近くにいる他職種の会員と連携できる仕組みの構築。
- 医科歯科連携やその他の分野の多職種連携。
- 多職種が参加している強みを生かした運営。
- 多職種で交われるという魅力を最大限に活かし、多職種で取り組む活動の増加。
- 多職種で行う情報交換の場を充実させること、およびその宣伝。
- 多職種が関わる作業部会の公募（会員対象）。
- 医療職に限定しない幅広い会員構成の強みを活かした委員会活動（研修企画、オンライン教材作成、学会としての研究等）の促進。
- 若手の活躍にとどまらず、様々な背景、経歴の方の多様性を生かした運営。
- 小児科医の参加、小児科医が他職種に関わる必要性が理解できるような運営。
- 小児保健と関連する学会との連携。
- 各都道府県の保健学会の組織化。
- 小児保健・福祉が総合小児医療に包含するような方針を示すこと。
- 様々な立場の人に広く存在を周知する。会員に限らず、一般向けのわかりやすいセミナー開催などを提供する（既発表の論文、学術集会の内容をわかりやすくしたものなど）。また、参加者が相互に交流できる内容であることも有効。
- 学際的に子どもの健康の保持増進に関する取り組みの発信。
- 保育園や福祉からの実践知をもっと発表できるような支援。
- 実践的なセミナーを行ってほしい。
- セミナー等は、医療職ばかりが登壇している。心理職や保育職なども登壇して初めて協会としての多職種連携・協働と言えるのではないか。
- 保健医療福祉教育等の関係者だけでなく、子ども（成人移行含め）と家族が活用できる一般向けのガイド等の作成。対象となる子どもと家族（当事者）も含めることで、魅力が増す。

②学会企画に関すること

- 多職種で話し合えあるワークショップの開催。
- コメディカルが参画できる活動。
- 若手、理事、評議員だけでなく、中間層を含めたあらゆる年代の意見を反映できる調査等の企画。多職種と交流する場を増やし、実践の質を高める企画。
- 学術集会の演題が、全くその領域の知識がない人向けの内容が多い。もっとその領域の専門職向けの演題や講演、実践・症例報告などが増えれば有難い。
- 科学的根拠に基づく実践研究成果の報告の増加。
- 理論を実践に活かす情報提供や、小児保健の最新の情報提供。
- 主な初期対応（一次）の現場にいる小児科診療所の医師の実際の活動、リーダーシップ

等々、これらに必要な資格や様々な情報に関する発信。

- バックグラウンドは様々であるため、若手以外にも機会を増やしてほしい。

(3)開催方法について

①オンライン開催の促進

- WEB で参加できる魅力的な研修会を開催する。
- オンラインでの講演がより多くなると助かる。
- 興味のある講演会についてメルマガでお知らせが届いても、勤務の都合で参加できないことがある。当日参加できなくてもオンデマンド視聴ができるとよい。
- Zoom で会員が無料参加できる研修会などの機会を増やす。
- 研修会等の活動は十分に魅力的。WEB 上でも交流できる場が複数あるとよい。

②対面でのつながりの促進

- リアルな場所でより繋がれる仕組みづくり。
- 対面での学術集会がいずれ再開すると思うので、対面ならではの企画を期待している。
- コロナの状況もありますが、オンラインだけでない研修の場を設けてほしい。
- 地域ごとの多職種が参加可能な講演会や勉強会を開催してほしい。

(4)発信方法について

- SNS を積極的に活用し、若手専門職が抱きがちな「学会ってなんとなく敷居が高い」というイメージを払拭することが必要である。
- 非常にためになるセミナーを開催されているのが本協会の特徴である。しかし、その魅力的な取り組みを有効的に発信できていないと思う。取り組み自体は魅力的だが、魅力の発信方法を検討するとよい。
- 小児保健協会活動の小児科医への発信。
- 最近の小児保健研究に掲載されている論文が google scholar の検索では挙がってこないの、挙がるようにする。
- 学会誌が無くなり、わざわざホームページをあけるのが面倒くさく（もともとアナログ人間）、情報を得る手段が減ったと感じている。年に 1 回でもいいので学会誌を作成してほしい。
- 子育て支援に関わる情報発信を行い、メディアに取り上げてもらうよう働きかける。
- 専門職だけでなく、最新かつ正しい情報を子どもとその家族が受け取れるような仕組みができればよい。

(5)今のままで十分

- 今のままで十分だ。
- 現状維持が良いと思う。

- ・ 本協会は、子どもと家族の保健・健康に関して幅広い視野で活動している。多くの職種が参加していることも、その幅の広さに繋がっている。投稿論文、学術集会、セミナー等も大変興味深く、拝読し、参加している。他の学会にはない魅力をここに感じている。

(6)その他

- ・ 役員や代議員の選出がわかりにくい。若手や多職種の発言権が増すとよい。
- ・ 各委員会活動の見える化。
- ・ 委員会活動が公募でもなく、一部の方で行っている。
- ・ 小児保健に関する専門医などの資格を作成する。
- ・ 立ち位置をはっきりさせる。
- ・ 地域における保健活動を盛り上げると全国組織の協会活動も盛んになるのではないかな。
- ・ 最新、かつ正しい診療で、被虐待児童の特性が、「発達障害」とされずに適切に診断されることを推進してほしい。学校現場でかなり混乱している。
- ・ 査読結果がわかりにくい場合に編集委員会のサポートがほしかった。
- ・ オンラインの学術講演会で、無料の物があると大変ありがたい。
- ・ 学会費や学術集会などはある程度高額でもやむを得ないが、無料で参加できるセミナーがあるとすそ野が広がるのではないかな。保育士も看護師も勉強したい人がいるが、時間やお金が、とくに地方ではネックになっている。

5. 調査結果にみる本協会の魅力の再発見・期待

本調査結果より考えられた本協会の特徴として主に以下が挙げられた。

- ・ 多職種による会員構成
- ・ 実践現場で活動している会員が多い
- ・ 学術面だけでなく、小児保健の実践につながる様々な資源を有している（各種研修会・セミナー等を含む）

このような特徴から、本協会の魅力とさらなる期待として下記が考えられた。

①多職種による参画・連携

②本協会がもつ最新の知見・情報発信力や教育支援力という魅力と、ICT 活用を含めた今後へのさらなる期待

謝辞 お忙しいところご回答頂きました会員の皆様に感謝申し上げます。本報告書の一部を第 70 回日本小児保健協会学術集会で発表いたしました。講演録（小児保健研究 83 巻 2 号 p75-92）も併せてご参照ください。